

大徳寺！島田旭光▼茨木！田中敷水▼羅生門
 ！浜本旭好、田中旭昇▼坂本竜馬！岡本旭村
 ▼台湾入！伊勢谷安江▼都落ち！内藤旭波▼
 平泉懐古！川上琵琶▼新選組！梅原旭瀧▼雪
 晴れ！内田欽水▼湖車乗切！反町紫水▼花の
 白虎隊！木庭旭山▼時は今也！平井春嶺▼大
 石主税！柴田旭堂▼敦盛！木原綾子▼二百三
 高地！藤巻旭瀧▼曲垣平九郎！楊淑水▼伽羅
 の兜！中島旭穂▼扇の的！島津津天嶺▼淀君！
 菅旭香▼菊水の旗！三浦蓮水▼彰義隊！大迫
 旭山▼大楠公！渡島旭鷲▼井伊大老！木下皇
 水▼文覚発心！板谷旭邑▼羽衣！桜田吟芳、
 小川吟水▼大物の浦！高千穂旭楓▼対王丸！
 富樫旭桂▼松の廊下！中山鳳水▼鶴ヶ岡！山
 崎旭萃。
 (いろはにほへと生)

日本芸術琵琶會演奏会

六月六日(日)屋東京港区赤坂公会堂、後援錦
 心流一水会。石童丸！飯尾。絃旭登▼秋風故
 郷の山！丸田。絃弾峰▼桜井の駅！今井▼二
 ○三高地！長岡旭玲▼井伊大老！反田昇水▼
 坂崎出羽守！青木早水▼恩讐の彼方に！長谷
 川肅水▼修善寺物語！杉山旗水▼異国の丘！
 杉山富士代。絃旗水▼大楠公！佐藤旭尚▼奥
 の細道！鈴木好水▼伽羅の兜！金森旭弾▼菅
 公！金尾秀水。舞金尾水岳▼若き敦盛！若宮
 旭登▼茨木！高田栄水。外に吟詠六題。

故辻靖剛先生追悼琵琶名流大会

六月十三日(日)屋東京日本橋東京証券会館ホ
 ール、主催日本琵琶協奏会(有料)。東西の
 名流一堂に会し盛会であった。弾法合奏！故
 人門下生一同▼白虎隊！油科綾香▼北の庄！
 内田旭章▼景清！荒川洲帆▼吉野落(一)！清川
 嵐舟▼隠岐の月！都錦穂▼須磨の浦！輝錦凌
 ▼湖水乗切！広瀬圭穂▼敦盛！石坂鶴朋▼常

陸丸！仲川秀邦▼二○三高地！小原旭成▼源
 実朝公！水藤五朗▼武蔵野(録音)！故辻靖
 剛▼村上喜剣！友吉鶴心▼小松の操(一)！平井
 春嶺▼羅生門！原島旭粧▼井伊大老！木原綾
 子▼夢！桑名洲聖▼彰義隊！須田誠舟▼四糸
 殿！柴田旭堂▼乃木將軍！中谷裏水▼乞食瓢
 六！最上徳洲▼衣川！藤巻旭瀧▼迷語もどき
 ！遠藤鶴東▼小栗栖！山崎旭萃。

月下翠風演奏会

六月十三日(日)夕東京新宿駅西口前安田生命
 ホール、後援みどり琵琶本部(有料)。竜の
 口！浅香秋芳▼隅田川！吾妻江雪▼三絃江風
 ▼伏見の里！吾妻江風▼関ヶ原！会主竹下翠
 風▼会津の華！杉山旗水。外に竹下、浅香両
 氏による「故辻靖剛翁に捧ぐる短歌」八首を
 はじめ朗吟十三題。(振りつけ水木歌寿栄、
 尺八田中栄重)。

ラヂオ琵琶放送

○五月二十九日(日)午後一時NHK・FM
 「武士盛衰記」謙信と信玄の巻」の時間
 帯に「川中島から」を故榎本芝水(録音)
 「月下の陣から」を平山万佐子両氏、外に
 講談、箏曲、義太夫、長唄、小唄等四十
 分間放送、解説加藤猛氏。
 ○同日午後六時NHK・FM「邦楽百番」
 の時間帯に「敦盛」を鶴田錦史女史放送、
 外に横山勝也氏の尺八(計四十分間)。

多賀帯水(重作)氏

四月二十七日腸閉塞のため逝去、享年八十
 六才。大正十一年故山田鶴水氏の門に入り奥
 伝、水号允許。一水会京都支部所属、乃木將
 軍、常盤御前の曲などが得意であったが晩年
 は専ら詩吟に凝りさびのある声で新界に活躍

した。法名釈重雲。謹んで御冥福を祈る。

(予告)

○七月八日(日)午後三時十分NHK・FMラ
 ジオ「石童丸」木原綾子女史放送。
 ○京都琵琶協奏会七月例会 七月十一日(日)午
 後二時本部平井会長宅。
 ○京都琵琶協奏会の須磨浦一泊懇親会 七月
 十六、十七日(日)十六日正午阪急三宮駅集
 合。(山崎、板谷両女史も参加予定)。
 ○京都八坂神社奉納琵琶演奏会(祇園祭)
 七月二十三日(日)午後五時同神社能楽堂。京
 都琵琶協奏会協賛。
 ○一泊演奏会 七月二十五、六日(日)月、静
 岡市八幡二四静岡温泉三楽荘、主催岡尾鶴
 城氏。二十五日正午一五時弾交会、二十
 六日午前中弾交会、午後日本平山上から靈
 峰富士遠望鑑賞の後久能山東照宮参拝。

きかとあ

暦の上での入梅は立春から数えて
 百二十八日目にあたる●歳時記など
 これは百三十五日目と書かれていても
 ようなものであるが、免に角降っても照つて
 梅雨期中は蒸し暑くて気が悪い●本号編
 集が降つたり止んだりの日が続いてい
 が、これが文字通り酷暑炎暑と暫く戦
 々なり、やがて文字通り酷暑炎暑と暫く戦
 なくればならぬ。どうぞ充分ご自愛下さい●
 別掲の通り八月号は暑中特別号として有益
 記事満載し併せて貴名を掲載させていただきます●
 同人相互間の健康を祝し合いたい●精々多数
 御協賛をお願い申し上げます。

昭和五十七年七月一日発行(非売品)
 編集者 植村 稟
 発行所 吹田市山田東一丁目三十一番地
 〒565 電話 〇六(八七五) 〇三二六番

琵琶 機関紙

京

絃

第三三七号 京絃社

平家の栄華と都落 (六)



旧き都を 来てみれば
 浅茅が原とぞ荒れにける
 月の光は 隅なくて
 秋風のみぞ 身にはしむ

京都がどんなに荒れ果てたか、これで大概
 一人の責任であった。此の荒廃は、全く清盛
 一人の責任であった。人々がこれを怨み、こ
 れを憤って居る事、清盛の耳へも入らない筈
 がない。清盛は十一月初め、富士川の水鳥に
 驚いた維盛が、十騎の従兵と共にすごすごと
 帰って来たのを見て、福原の都作りを思い切
 り、元のように都を京都へかえして、世間の
 反感を和らげようと、十一月二十六日それ
 を断行した。然し京都は既に荒れ果てている
 のだから、人々はまた家を建てなければなら
 ぬ。人々は喜びと同時に憤りを感じた。

また清盛は、先きに後白河法皇の院政に不
 満で、法皇を鳥羽殿に幽閉して院政を廃止し
 た。それは治承三年十一月の事で、自分だけ

で勝手に政治をとって来たもの、うまくゆ
 かないどころか今や大失敗となったので、又
 元通り院政を、と法皇に願ひ出した。治承四年
 十二月である。これで責任は少し軽くなった
 と清盛は思ったがその罪は消えず、問題は、
 いよいよむつかしくなった。

そこへ起つたのが奈良の焼討ちである。奈
 良には興福寺と東大寺の二大寺院があつて、
 その武力は比叡山、三井寺と肩を並べていた。
 それが高倉官を奉じて平家を亡ぼさんとし、
 源三位頼政戦死の後も少しも態度を改めず反
 抗の気配は募るばかり。ために清盛は治承四
 年末、頭中将(中将であつて蔵人頭に任ぜら
 れている人)重衡を大將軍として之を討伐さ
 せた。重衡は清盛の五男で、重盛や宗盛の弟
 である。重盛は一年前に病死したので、今生
 き残っている兄弟の中では、重衡は勝れた人
 物であつたが、奈良の攻撃、奮戦して僧兵を
 破り、城を二つ落としたりまでは無事であつた

これは治承四年十二月二十八日夜のことだ
 ある。重衡は戦勝つて京へ帰つたが、喜んだ
 のは清盛だけであつた。
 翌養和元年、清盛は病氣になつて一月末か
 ら高熱に苦しみ、閏二月四日、六十四歳を一
 期として死亡した。死に臨んで

保元平治よりこのかた、度々の朝敵を平
 らげ、勤賞身にあまり、忝くも一天の君
 の御外戚として亟相の位にいたり、栄華
 すでに子孫に残す。今生の望は一事も思
 ひおくことなし、只思ひ置く事としては、
 兵衛佐頼朝が首を見ざりつることこそ何
 よりも又本意なけれ。我いかにもなりな
 ん後、仏事孝養をもすべからず。堂塔を
 も立つべからず。急ぎ討手を下し、頼朝
 が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。
 それぞ今生後世の孝養にてあらんずるぞ。
 と遺言した。
 間もなく源行家は、尾張・三河の兵をもつ

て東海道を塞ぐ。平重衡は維盛・通盛等と共にこれを攻め、三月十日、墨股河の合戦で源氏を破った。牛若丸の兄乙若丸は僧籍にあつて義圓と称したが、この戦で討死した。平家は勝利を得たが、追撃せずに京へ帰った。



おんなの都 (一一)

落合一誠

淀君 (IV)

懐妊したおちやちやの功をめでて秀吉は、淀城を贈っている。大阪と京と大和に通じ、淀川、木津川、宇治川の合流点に位置するこの淀の地は重要な場所であった。そのため古くから城があり、たびたび攻防戦が行なわれた記録がある。

だが、秀吉がおちやちやにこの城を与えたのは、自分のいる伏見や大阪から通い易かったからで、由来、女性の身で一城の主となつたのは、恐らく淀君の外にはあるまい。

城といつても淀君の住んでいる館が主となつていたものと思われ。淀君はここでお棄て君を生んだ。

お棄てとは奇妙な名であるが、当時捨て子はよく育つという俗信があつたからで、そのため秀吉は、わざわざ我が子を捨て、家臣に

拾わせるという、芝居がかった演出をした。既に五十三歳になつていた秀吉は、最早子室に恵まれないものとあきらめていたのに、始めての子が、しかも男の子が誕生したのだから、文字通り狂喜舞した。

名もなき百姓の子に生まれて、これ以上の出世はないという関白・太政大臣の位に昇つた秀吉にとつて、望んで得られぬ物は何一つないと云つてよかつた。その後継者が始めて誕生したのだから、秀吉はそれこそ目に入れても痛くないほどの親馬鹿ぶりであつた。

やがて鶴松と名づけられたこの子を、生母淀君と共に大阪城へ移し、これで豊臣家は万歳と思つたことだろう。

しかし、無情にも天はこの掌中の珠ともいふべき愛児に、寿命を与えなかつた。鶴松は三歳になつた八月五日、手厚い看護も及ばず遂に短かい生涯を果て、しまった。精も根も尽き果てた秀吉は、がっくりと首を垂れ自らもとゞりを断つて喪に服した。

無論母の淀君も悲嘆に暮れた。だが淀君はまだ二十六歳、その若さと負けん気が、わが子を失つた傷心から直ぐ立ち直らせた。

秀吉は、この悲しみから抜け出したいといふので、外国遠征の暴挙を企てた。そして関白職を甥の秀次に譲つて、九州名護屋へ出陣した。この時淀君は、他の側室たちと共に名護屋の陣営におもむいている。

ところが朝鮮攻略は、緒戦に勝つてあとが長引き、これが結局太閤の命取りとなつてし

まうのだが、その間に淀君は再び懐妊して、又もや男児を生んだ。

無論秀吉は大喜びで、今度こそ大切に育てようと、前例通り一旦棄て子として拾ひ上げ、お拾いと名づけ大事に育てた。

秀吉五十七歳、淀君二十七歳で誕生したお拾いは無事三歳を過ぎて秀頼と名づけられ、淀君はあと継ぎの生母様と下へも置かぬ厚過を受ける身となつた。

秀吉は正妻ねねと側室たちの間に隔然たる順席をつけ、側室たちの監督をすべてねねにゆだねている。そして子のないねねは、お棄ての時もそうであつたが、秀頼を実子同様に可愛がっていたらしく、秀頼は二人の母を持つた如くに、ねねによくなつていた。

しかし、この時既に秀吉の命運は尽きていたのである。(未完)



四絃漫筆

島津天嶺

(十) 芸能力

前回は全く未消化の「孫引き談義」で終始してしまつたが、守屋先生の御所説によると芸能の目的は一座している者——演者と観客——がある種の共感に買かれるということ

ある。即ち観客が演者の表現しようとするものに感能して同じような想念を持つことであることがわかる。この一座するものを感能させる力を仮りに「芸能力」という言葉で表わすと芸能力の大きい人ほど芸の達者ということになる。

ところが聴客(問題を琵琶に限るのでこの言葉を用いた、聴衆と同じことであるが、個人としての聴衆ということでは観客に対応させない)は演奏者の芸能力だけに感能するものではない。第一に会場の構造や施設のよしあし、それに聴客のその時のコンディションによつても感能度は違つてくるであろうが、このようなものを除いても次ぎのような要因によつてずいぶん左右されるものである。

一、演奏者と聴客の間に親子、友人、師弟などの緊密な、つながりがある場合、又いわゆるフアン的關係があると感能力は強くなり、演奏前から感能している場合も起る。

二、演奏曲目と聴客との關係
例えば旧海軍軍人の会合で「戦艦大和」を演奏すれば聴客の感動は大きい。従つて芸能力の比較的小さな人でも大きな感動を与えることができる。琵琶会で白虎隊や城山などの曲が多く歌われるのは聴客の多くの人がこの史実の悲壮さを知つていて感動しやすい状態にあるためであろう。

三、演奏者の容姿、風采、扮装等
琵琶は本来聴くものであるからここにあげたものは無關係のようであるが、聴客は演

奏者に注目するからやはり問題になる。平家琵琶や当道琵琶は盲人男子によつて行われていたから昔はさほど關係なかつたかも知れないが。

四、演奏者の肩書、経歴等
家元とか宗家とか師範とか雅号とか肩書のある方が、やはり感動を与えやすい。又、過去に何かの芸能賞を受けているとそれだけでも聴客の期待は大きく、より感動するようになる。

今の歌謡曲界が好適例である。一応私の考へついたことは以上のようなものであるが、これらの要因がその人の「真の芸能力」にプラスされて「総合芸能力」を形成する。そして芸能人はこの「総合芸能力」をより大きくすることに努力しなければならぬようである。

さて、では芸能力はどのように測定するか、科学的手法をとれば多くの演奏者を同一条件で——同じ場所、同じ曲目、同じ演奏時間等——演奏させ同じ聴衆が受けた感動度を調査すればよい筈であるが、今までこのような試みがなされたかどうか私は知らない。音楽心理学という本があるからには芸能心理学も研究されているのではないかと思つているが未だ尋ね当らず、読者諸賢の御教示を頂ければ幸甚である。

もっともこのような難しい方法によらないでも芸能力の大きさはどれだけ長く聴客をひきつけ得るかということで大よそはわかるよ

うである。即ち初心の方の場合、最初の興味が次第に薄くなつてゆく、この減衰度が大きい名人達の方になると最後まで減衰しないで持続するから聴客の興味を保持する時間の長短を、芸能力の大きさを測るひとつの目安とすることができるようである。

話は飛ぶが最近NHKテレビに落語や講談の四十五分間独演の番組ができた。落語の方はジェスチャーも入るが、講談の方は扇一本なので四十五分という時間を、観客を飽かせず語りつづけるには余程の芸能力があるようである。琵琶の場合でも「四十五分間独演」となるとなかなか骨の折れることであろう。

毎月一回放送されているNHK・FMの琵琶放送は最近一人三十分の番組が多くなつたが名人上手ばかりなので楽しく拝聴しているがなかには少し荷が重く感じたりすることもなきにしもあらず、自分の芸能力に見合った演奏時間を考えることは賢明なことであると思ふ。

ここでひとつ提案をしておきたい。それはボクシング界に五回戦ボーイや七回戦ボーイがあるように、琵琶界でも七分、十分、十五分位の短時間出演者を定めて放送させることはできないかということである。まだ十五分の演奏は無理な人でも七分間ならばソツなく演奏も出来、聴取者も満足しよう。七分番組から十分、十五分の番組出演と次第に昇進させる制度である。このようなシステムができれば若い人々も放送の機会を持つことがで

き、若い琵琶人にとって大きな刺戟となる。又このような体験の積み重ねによって立派な琵琶人が出現するように思う。

なお私の提案にはNHKは養成機関ではないという反論がすぐ聴こえてくるようであるが、現在放送されている吟詠に比べれば七分間琵琶でも立派な完成された芸能であると私は信じている。(未完)



五絃閑話

水藤 五朗

著作権 (一)

最近、私には不思議に思えてならないことがある。それは日本琵琶楽協会の演奏会で、錦心流として出演する人々の曲目の作曲者名のことである。即ち、錦心流として演じられる曲目の作曲者が永田錦心でないことである。これは何故なのであるか。こゝ数年來この傾向は強まってきている。勿論、永田錦心没後五十年を経ているのであれば、錦心没後に作詞作曲されたものも相当あり、更に云えば錦心生前中に、錦心流としての形式を保ちながら作曲されたものもあつたであろうからすべての曲が錦心作曲でなければ等と云っているのではない。

十数年前迄は、誰人からも錦心作曲と自覚されてきたはずであつた曲が、いつの間にかそうでなくなつていく。関西某琵琶会のプログラムには「松の廊下」作詞高松春月、作曲谷暉水」とある。又、東京での会一六月十三日には「白虎隊」小田錦蛙作詞、水藤錦穰作曲」とある。一水会本部で刊行している「愛吟集」や、その他の資料から考えても、永田錦心と記すことが、やはり正しく、芸道の論理ではないかと思う。

ただ、琵琶人の社会は谷暉水師の門人であれば、谷暉水、錦の門下であれば錦穰と記すのが当然!!であるからそうしたのであつて、その事がさしたる話題にならないのだと思う。話を広げれば、薩摩正派にはこの様な例が多い。「城山」は薩摩琵琶の人気第一位の曲であるが、果たして作曲者は誰人なのであるうかと門外漢は迷つてしまう。即ち、勝海舟が作詞して西幸吉が節付けしたのだと思つて多くの人の意に反して、池田天舟とか大照秀子とか、とにかくいろいろな名前が作曲者として登場する。勿論、この人々を作曲者か否かと詮索しようと云うのではない。むしろ、薩摩の「御家流」の論理からすれば、これは当然の帰結なのだと思つて、琵琶会に始めてくる人は、やはり不思議と思つてであらう。

琵琶には、いや薩摩の正派や、錦心流には特定の作曲者はいないのだ!!と主張して、多くの門外漢の人々を納得させる努力が払われ

なければ、この琵琶界特有の慣習は理解してもらえないであらう。即ち、琵琶そのものを今日一般社会の人々に判つてもらつただけでも至難であるのに、それに加えて、琵琶界の特殊性までも訴えてゆかなくてはならないとは、なんと茨の道を、今日の琵琶人は選んでいるのであらうか。

一般の芸界なら永田錦心作曲は出来得る限り錦心作曲を再現演奏して、永田錦心作曲と名乗ればよく、「城山」であれば、最初に手がけた西幸吉の節付けを再現することに努力をして、西幸吉作曲と名乗れば良いとされる。この様な存り方に琵琶を持つてゆくことこそ現代に琵琶を位置づける基本であるといえる。

この点、筑前琵琶は理想にかなり近いと思つて。即ち「湖水渡り」も「義士の本懐」も更に「秋風故郷の山」も、作曲者の曲想は確実に再現されようとしていく。たゞ芸術が個性の発露である以上、多少の演奏曲風に相異が表われてくることは致し方ないと思つて。いや、それはなければならぬものでもある。

明治中期に作曲された筑前の四絃古曲が、その作曲者の曲想を十分に生かされ現代の人によって演奏されてゆく姿は伝統芸能、伝承芸能としては当然でもあり、又、必要欠くべからざることもある。三百年余りに作曲された八橋検校の六段を、作曲家は敢然として守つている。更に云えば、千年以前もの古代に於いて作曲された越天楽を、雅楽の人々は伝えている。こう考えてみると、何故僅か

五十年しかたつていない名人錦心作曲がそのまま伝承出来ないものであらうか。又、討論されないものであらうか。

薩摩正派や錦心流にとって、作曲とはどのようなことを意味しているのであるか、よく考えなければならぬ。「城山」の作曲者が多数いる事が一般社会で起つたならば、それこそ大騒ぎである。宮城道雄の「春の海」に多くの作曲者名が出る事になつたらどうであらう。薩摩正派の思想である「御家流」、先ず最初に出かけた人の名を消す異常なものであるとは思えない。むしろ、作曲についての充分な検討のないままに作曲を記すことを強制させられた為に生じた混乱ではないであらうか。

こゝ数年、著作権への関心が高まっている。毎々述べる如く、琵琶界そのものが現代にその位置を求めようとする以上、著作権についてもやはり務めを果たさなければならぬのである。たゞ、その著作権について対処する姿勢をよく考へておかなければならぬのである。薩摩と筑前にある作曲についての演奏に於ける思ひの相異をよく理解し、そして正し合つて、総意として著作権に対処してゆかなければならない。琵琶会に著作権は無縁だと、いつまでも閉鎖的に構へていたのでは、逆に、社会から無視されつづけることになってしまうからである。



沖繩南部戦跡と玉泉洞 (下)

辻 旭城

筆者は数年前、文獻沖繩タイムズ社編「鉄の暴風」を読んだことがあるが、その中の一節に「その夜、最後の分散会が行われた。それは最後の学芸会を兼ねたもので、死を決意した女子学生たちは明朗冷静、各人得意の歌を唄い、最後に「海ゆかば」を合唱した。」

県立第一高女、沖繩女子師範の学生百四十三名と、教職員十五名の総員百五十八名は、軍の要請によつて看護兵として参戦する最初の二十年一月のことであつた。

その後米軍の攻撃は日増しに激しさを加え、姫百合の塔のある本島南端三和村伊原の洞穴に追い込まれたときは、その人数は僅かに四十人になつていった。

あゝ、昭和二十年六月十九日!! それは死を決意したさやかな宴であつた。うら若い十六歳から二十歳までの乙女たちの心は、いかばかりであつたらうか。戦いは、乙女たちの清らかな心のみならず、その生命までも奪つてしまつたのである。

姫百合の塔は翌二十一年、同窓会の手で建てられ、石碑に刻まれた。いわまくらかた

もあらんやすらかに、ねむれとぞいのるまなびのともは」の文字が涙を誘う。

一帯が沖繩戦跡公園の摩文仁丘は、ここからバスで十五分のところ。二十年六月二十三日、沖繩第三十二軍司令官牛島満中将は、この丘で美事に割腹自決した。

那覇国際空港からバス十五分、那覇のメーソストリート国際通りは、那覇警察から安里交叉点までの約一キロ半、敗戦直後焼け野原の中から逸早く復興し、島民たちから「奇跡の一マイル」と呼ばれている。

南部戦線攻防のあとをふり返つてみると、昭和二十年三月下旬米軍の慶良間諸島上陸以來、九十数日に及ぶ激烈な攻撃は沖繩本土に大損害を与へ、戦争関係者の殆どが玉砕して沖繩の攻防戦は事実上の終焉をみた。この悲惨を極めた戦争に、戦死者の正確な数字は日米両国とも判明しないが、日本側はおよそ二十万人で、軍人・軍属十五万人、民間人五十万人、いかに激戦地であつたかがわかる。大地を美しい緑に覆つていた草木は、砲爆、空爆であとかたも無くなり、地形まで変つたほどであつたといふ。

今は奇麗に整備され、当時の面影は全く無い。駐車場から左右に夾竹桃の植えられたなだらかな道を登る。左右には、全国四十六都道府県の慰霊塔が建ち並び、坂道を登り切つたところ断崖の際に牛島司令官を型どつたと いわれる黎明の塔が建つている。

左手には、珊瑚礁特有のエメラルドグリー

ンの海が広がり、南国の強い陽ざしを浴びて輝いていた。美しい南国の風景の中に、静かに摩文仁丘が佇んでいた。



海底に眠る「戦艦大和」

長崎県・男女群島近くの東シナ海の海底に眠る旧日本海軍の戦艦「大和」(全長二六三米、六万四千排水トン)の探索を続けていた「戦艦大和探索会」石田恒夫実行委員長

石田委員長らの話では、同艦が男女群島の女島南方約七十キロ沖の海底約三百六十米に横たわっているのを確認、水中カメラテレビによる撮影にも成功したという。三千余人の将兵とともに海底に沈んでから三十七年ぶりの確認となった。「大和」の沈没位置は北緯三〇度四三分一七秒、東経一二八度〇分〇〇秒。調査団は、沈没地点の海面に浮標を設立して帰った。また、「大和確認」後の二十七日午後七時、調査団全員参加、鎮魂の祈りを捧げた。(朝日新聞所載—写真省略)

来たる八月一日発行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

夏期特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え七月五日迄に御申込み願います。



大念仏寺春季大法要に琵琶献奏会

五月四日(火)昼、大阪琵琶同好会協賛。君ヶ代合奏一同。小楠公の母。西尾。吉野山懐古。栃木。赤垣源蔵。寛嶺水。河内の宿。玉村旭正。那須与市。松本旭勇。白虎隊。石田旭心。本能寺。小林旭進。菊水の旗。島津旭都。伏見の吹雪。米原旭智。衣川。矢野旭信。壺坂寺。米田旭春。妻の片袖。石橋旭嶺。小督の扇。東旭子。二〇三高地。奥村旭美。堅田落。野々村旭川。舟弁慶。田中敷水。外に詩吟剣舞など数番。

京都琵琶協会の五月例会

五月九日(日)昼二時本部平井会長宅。出席者馬場鴨水、林旭萌、田中敷水、楊嶽水、梅原旭濤、山岡旭清、安住旭康、木下皇水、水内媛水、平井春嶺、高橋正雄、佐藤。五月二十三日の演奏会プログラム発送準備のあと本能寺。馬場。舟弁慶。田中。曲垣平九郎。場。小栗栖。木下。山内。豊。山岡。堅田落。梅原。時は今也。平井の七氏研修演奏の後二、三の協議をなし夕食後七時半和やかに散会。

日本芸術琵琶會五月例会

五月十六日(日)昼東京豊島区南池袋内田ビル。屋島の誉。金尾秀水。異国の岳。杉山富士代。桜井の駅。今井昌子。奥の細道。鉢木好水。異国の岳。奈佐喜山。秋風故郷の山。丸田。彈扇。秋海棠。坂入俊風。吉野山懐古。福田。彈峰。伽羅の兜。金森旭輝。坂崎出羽守。青木早水。茨木。高田栄水。巖流島。長谷川綱水。大楠公。杉山旗水。以上研修演奏、小宴の後七時散会。

各流派琵琶春季演奏会

五月二十三日(日)昼京都東山仁王門バス停前本妙寺本堂、主催京都琵琶協会。緑風さわやかな好天に恵まれ開演前から十数人の聴衆が入場、程なく超満員の盛況を呈した。吉野山懐古。藤井康夫。城山。近藤高嶺。湖水乗切。楊光子。桜狩。山田明嶺。壇の浦秘曲。桜井旭富。山内。豊。山岡旭清。安達。原。西

川磯水。小栗栖。木下皇水。由比ヶ浜風。梅原旭濤。竜の口。矢吹旭美津。舟弁慶。田中敷水。神崎雪女。林旭萌。本能寺。馬場鴨水。新作蜘蛛の糸。平井春嶺。

洲楓会琵琶・詩吟演奏会

五月二十三日(日)昼東京港区麻布十番会館、主催洲楓会本部。月下の陣。三宅洲洋。紅葉狩。佐藤洲栄。忠度。平沢洲澄。吉野山懐古。根岸洲江。湖水乗切。富田洲寿。本能寺。志藤洲昭。竜の口。岡田洲峰。城山。岩崎昌夫。異国の岳。加藤洲晃。重衡。宮下洲楼。絃洲玲。西郷隆盛。真泉洲佳。白虎隊。中村洲心。羅生門。彼ノ矢洲友。茨木。荒川洲博。菅公。桑名洲聖。舞佐藤邦月。吉野落。松崎洲陵。横笛。山田洲鳳。桜狩。荒川洲帆。(賛助)羽衣。菊地香水。松井蓉水。絃菊地甘水。外に詩吟三十七題。

故松岡旭岡師追悼大演奏会

五月二十三日(日)昼神戸市山手通兵庫県民会館、主催筑前琵琶旭岡会、協賛神戸旭会。遠近各地から関係者参集出演、順照寺住職法会読経に続いて石童丸(録音)。故松岡旭岡。羅生門。橋田旭波。福西旭紅。絃旭穂。誉れの水馬。伴旭友。滝善三郎正信。丸尾旭宝。絃旭昇。橋中佐。高千穂旭楓。壺坂寺。近藤旭水。絃旭昇。西郷隆盛。竹本旭将。川中島。能勢旭陽。安宅の関。塩谷旭洲。新選組。岡崎旭彦。絃旭暢。小栗栖。中島旭穂。二〇

日本琵琶悠絃會五月例会

五月二十三日(日)昼東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏。一峰。錦幽。井伊大老。木村。淀君。田島。利休の最期。山崎錦幽。竜の口。金尾秀水。河内の宿。大富士岳。屋島の誉。清水環水。本能寺。青木早水。菅公。八束一峰。敦盛。杉山旗水。散会五時半。(当日来賓)軽部岳瑞、喜多村一城両氏。

錦心流琵琶演奏会

五月三十日(日)昼静岡市東草深町中央公民館、主催一水会静岡支部、後援同名古屋、豊橋両支部。月下の陣。杉山。七脚落。山崎。城山。横口。肉弾三勇士。佐藤英水。本能寺。北川碩水。衣川。海野京水。屋島の誉。竹林詩水。熊谷蓮生坊。杉山禪水。川中島。吉見輝水。敦盛。武田恒水。小栗栖。国府田謡水。西郷隆盛。仁王沃水。俊寛(下)。堀江疆水。竜の口。太田杯水。伊豆の御難。安江弘水。坂崎出羽守。田中訴水。河合蒼竜。村磯樓水。

第五回日本琵琶名流会

六月五日(日)大阪北御堂津村別院ホールにて日本琵琶楽協会関西支部主催の第五回日本琵琶名流会が午前十時より開かれた。この日は快晴に恵まれ、名流会開催を鶴首して待っていた愛好者は午前八時四十分より続々と会場に詰めかけ、十時開演の時には早くも八割方にて関係者を驚かせた。開演は時間どおり十時丁度で、これは第一回より必ず励行しており、聴衆より時間どおりの開演で非常に気持ちが良いと好評を受けている。

さて、午後〇時半頃よりさしもの大ホールも満員となり、補助椅子を出す有様にて、終演の午後六時十五分まで聴衆は一曲の始めと終りに万雷の拍手をする以外は静粛にてマナーの立派さに感心させられた。これは会場が大寺院のホールである雰囲気にも因るのだろうが、矢張り演奏者の好熱演に起因するところが大きかったろうと、自画自讃しているが特に、本部から応援して頂きました藤巻副会長、木原常任理事両師の御高名に因るところ甚大であることを忘れてはならないと思う。終演後記念撮影を行い、出演者および関係者の慰労と反省会を催し、午後八時過ぎ有意義であった第五回名流会を終了した。

終りに当り本会開催に終始お世話頂きました菅旭香師およびその御一同の方に紙上を借り深甚の謝意を表します。(曲目並びに出演者)栗津ヶ原。奥村旭翠。